

大分県考古学の諸問題 I

— 刻目突帯文土器の出現とその展開について —

高橋 徹

一、はじめに

大分県は北部において旧豊前の一部を含むものの、その大半は旧豊後国に属する。九州島の東北部に位置し、瀬戸内海を経由して東の文化が流入するためか、各時代を通じて北部・中部九州とは異なった様相を呈する。この数年における県下の遺跡調査は旧石器から、寺院跡・中世土器などの歴史時代遺跡にまでおよぶが、縄文時代貝塚遺跡に象徴されるように、二、三例を残してその大半が消滅してしまったものもあり、手ばなしでその成果を誇るわけにはいかない。

小稿においては最近の遺跡調査をふまえながら、大分県の弥生時代・古墳時代に関する諸問題の一端に触れてみる。

二、刻目突帯文土器の出現

最近福岡市板付遺跡において縄文時代晩期の夜臼式土器を伴う水田遺構が発掘され、弥生時代の開始に関する問題がにわかに関心を集めている。⁽¹⁾出土の古式とされる夜臼式土器は刻目突帯の粗製甕・大小の壺・深鉢などがセットになっており、板付I式とされる土器を混じえない、単純型式と報じられている。

賀川光夫氏は九州の縄文時代晩期をI・II式に整理しており、県内の個別型式名でいえば大石式、田村式、神宿式がこれにあたる。⁽²⁾

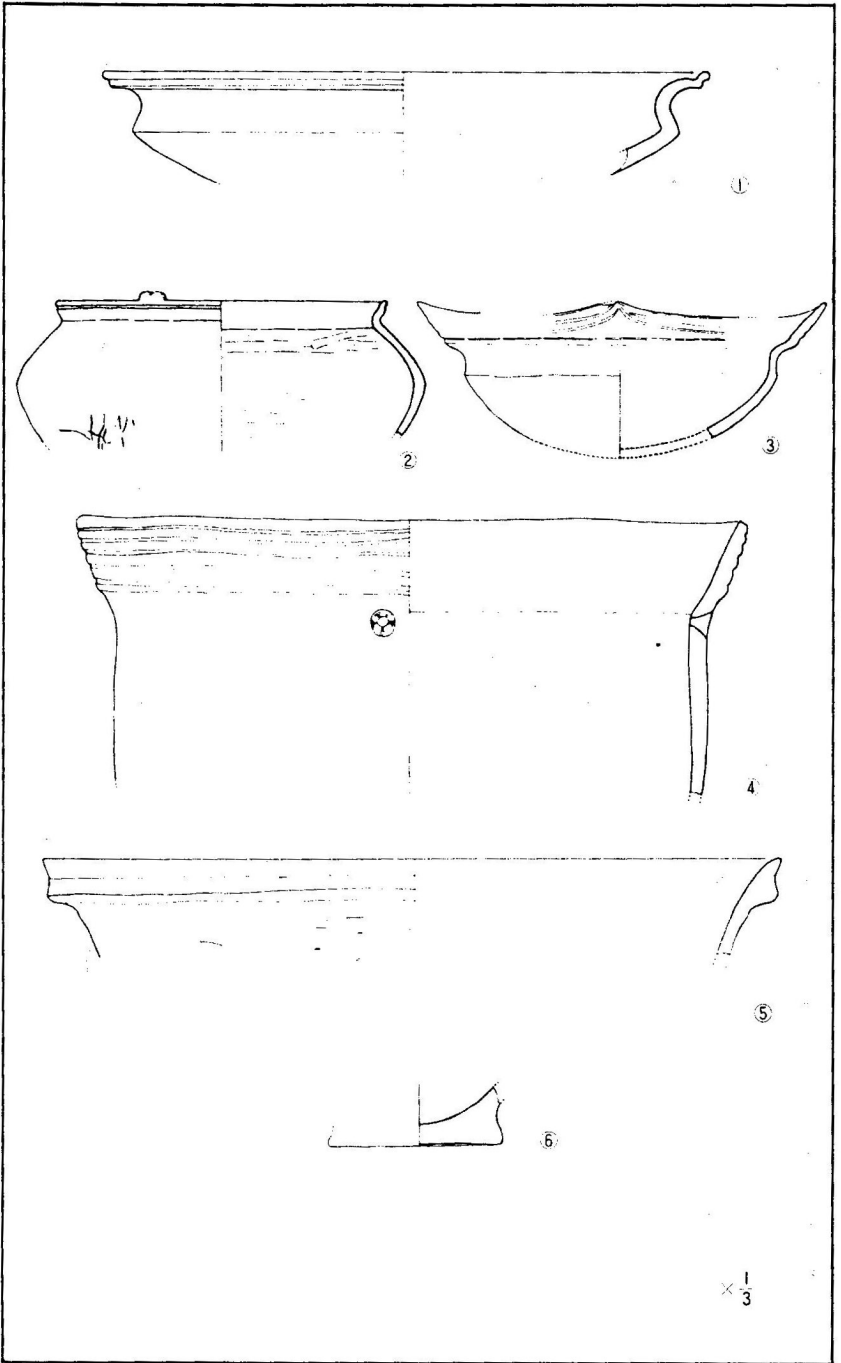
しかしながら、大石式を除くと他の型式名は型式規定が不十分で、各型式の変遷に関する説明にも整合性を欠くうらみがあった。ところが最近この時期の良好な資料が知られるようになり、土器編年の再検討が可能になった。私見は竹田市菅生所在の上菅生B遺跡の紹介をかねて既に発表しているが、再度ふれておく。³⁾

○上菅生B式

上菅生B遺跡は標高五五〇m台の菅生台地の一隅にあり、谷を隔てて荻台地に対する。一九七九年竹田市教委によって三二〇〇㎡の面積が調査され、縄文晩期の包含層、埋棺、弥生中期・後期の住居跡(8軒)、土壙墓(?)、および溝遺構からなる。晩期の土器は黒色磨研の浅鉢、粗製の深鉢、および突帯文粗製甕が主体で、わずかに後述の大石式を含むが刻目突帯甕は一点も検出されていないことに注目したい。主体になる土器群を「上菅生B式」と称したい(第一図)。浅鉢は丸底で口縁端部は丸くおさまられており、直立せず外反するのが多い。頸部と口縁端部の境が屈曲しないまま直線的にひろがるものもある。両者とも口縁部が波状になることはなく水平になる(第一図―①)。短い頸部に、胴の著しく張るもので口縁部にリボンを付着するものも少数ながら存在する(第一図―②)。粗製の深鉢も、口縁部が直線的に外反するもので、口縁外面に施された凹線も浅く整美さを欠く(第一図―④)。これは内外面を横方向に軽くケズリ調整する。他に山形に隆起する口縁部を持つ丸底の小形鉢があるがこれは弧状の凹線文を組み合せたもので、大石式にもあり後期末宮滝式など東からの影響が指摘されている(第一図―③)。

突帯文甕は外面粗い条痕で、外反あるいは内傾する口縁部下位に刻目のない突帯が一条めぐるものである。やや張り出し気味の平底から内湾気味に拡がる胴部上位が屈曲し口縁部に続くもので、口縁端部は尖り気味に丸くおさまられている。以上の上菅生B式は刻目突帯甕出現の前段階に位置づけられよう(第一図―④)。

この刻目突帯甕は大分郡狭間町の下黒野遺跡において良好な資料が確認されており、これを標式遺跡として下黒野式と呼ぶ。



第1图 上管生B式

○下黒野式

下黒野遺跡⁽⁴⁾は大分川をつくる沖積平野を見おろす標高一〇〇m弱の丘陵最東部にある。一九七四年県教委によって調査が行なわれ、縄文早期の炉跡、晩期包含層および弥生土器片少量が検出された。晩期の土器類は第2地点三、四グリットで集中的に検出されており、他の時期の遺物を含まず、単純なセットと考えられる。

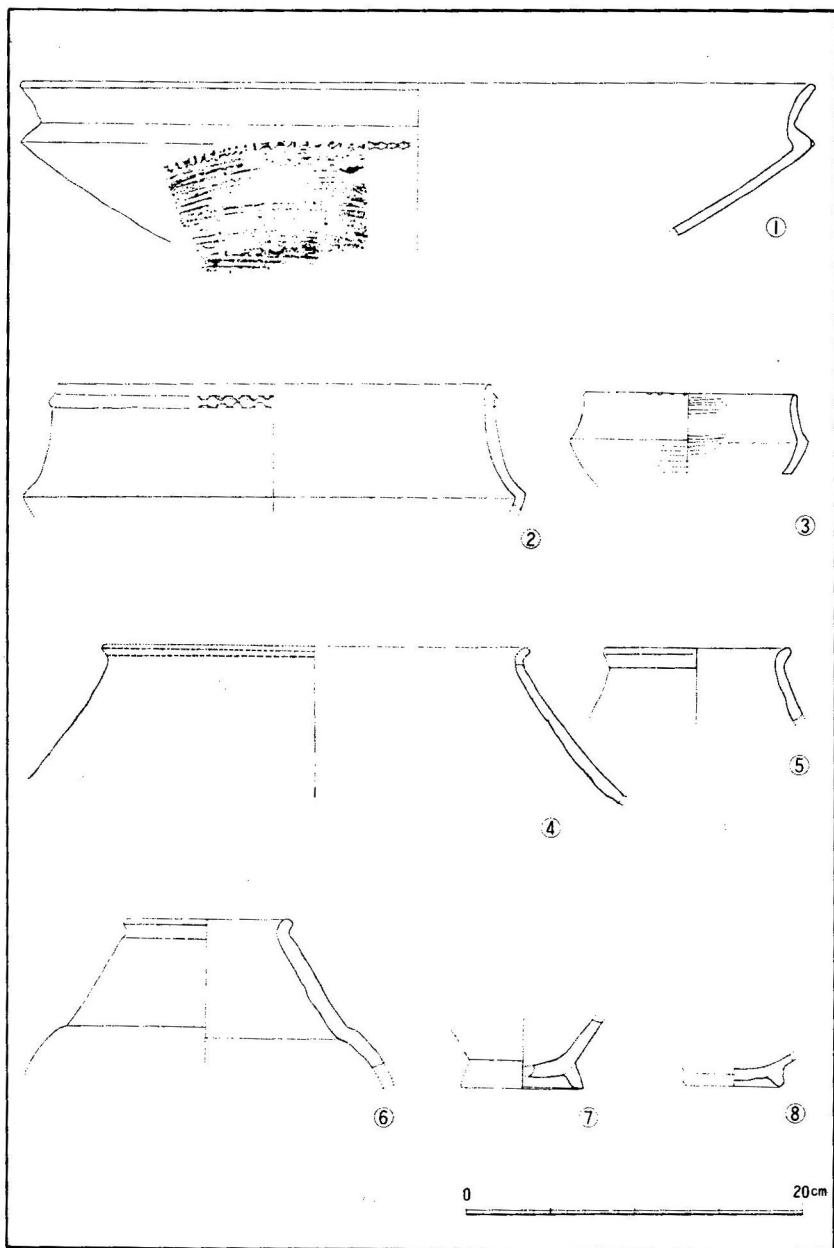
黒色磨研の浅鉢は口縁端部を単純に丸めただけのものであり、刻目突帯をめぐらしたり、口縁上端部に軽く刻目を施すものもある(第二図①、③)。

甕は口縁端下に刻目突帯をめぐらしたもので(第二図②)、端部上面を外方に張り出しこれに刻目を付したものもある。胴部の屈曲点には刻目が施されていないことを強調しておく。内外面とも横方向の条痕が施され、茶褐色を呈す。底部は凸レンズ状の底面に、外側に張出した高台様の粘土紐を巻くもので、いわゆる円盤貼付けのものは皆無である。これらの土器の他、新たに大・中・小の丹塗磨研壺が加わる(第二図④⑤⑥)。壺は口径十cmのものから二十五cm以上のものまでありいずれも短かく外反する口縁部に、直線的に内傾する太い頸部を有し、丸い体部と頸部との境に明瞭な段を示す。外面は横あるいはやや斜行する研磨が施され丹塗りする。内面にも口縁部付近に限り幅一cm弱の丹塗りが行なわれ、他は横方向の条痕仕上げとなっている。壺の底部らしいものは認められなかったと報告されているが、円盤貼付けの底部は皆無であるということなので、丸底かもしくは高台様の底部ということになろう。

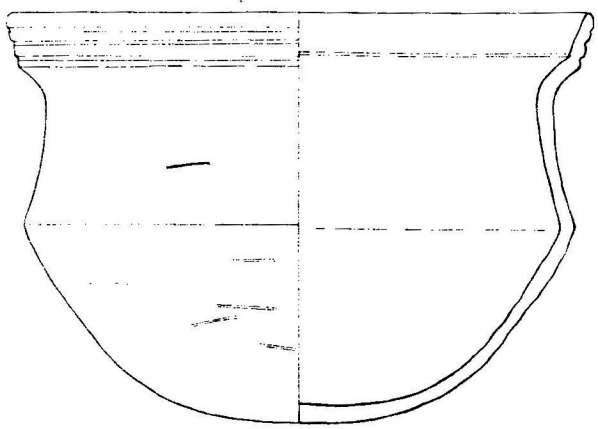
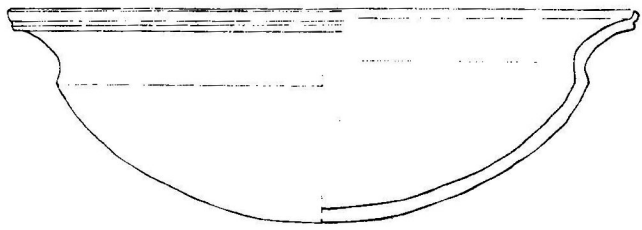
○浦久保式

ところで上菅生B式に先行するものとして直入郡荻町浦久保遺跡出土の土器群をあげることができる(第三図)⁽⁵⁾(これを以下浦久保式と称す)。

浦久保遺跡は谷尻原の台地西端部にあり、南に浅い谷をのぞむ。ここでは弥生時代の住居跡などは一切検出されず極めて良好



第2図 下黒野式



× $\frac{1}{3}$

第3図 浦久保式

な晩期單純の遺跡であつた。出土の土器も所謂大石式の新しい相の單純なセットととらえられるもので、上菅生B式にみられる突帯文粗製甕および刻目突帯甕は皆無であつた。外反気味になつた口縁部を有す浅鉢、深鉢類のみからなる。上菅生B式のものに比べると、まだ口縁端部の立上りが目立ち、深鉢口縁外面の凹線も比較的整美である。底部はゆるやかな丸底。口縁が山形に隆起する小鉢の弧状凹線文様も多く整っており、内湾気味の口縁部は長い。以下に述べる大石式（大石式古相）のものになると、口縁部がさらに大きく内湾しながら伸びており、文様も幅広く複雑であることから、この形式の鉢が、口縁部およびその文様の萎縮、粗雑化という方向で型式変化していったことがわかる。

この浦久保式の設定によつて、賀川光夫氏が提示した大石式の資料の中で、山形波状部を有し、口縁部が直立もしくは内傾し、凹線文や、楕円形凹文を持つ浅鉢や、直立の口縁部に数条の端正な凹線文をめぐらす深鉢等の古相の土器群が型式学的に抽出され得るのである。今これこそを狭義の大石式と規定すると、当地における晩期の編年は大石式（前葉）浦久保式（中葉）上菅生B式（後葉）下黒野式（終末）とたどれることになり型式学的にも無理のないものとなる。なお、大石式は御領式に後続するものであり、上菅生B式はリボン状の裝飾を持つ深鉢、椀形土器などを伴うことからおよそ賀川氏のいうII式に相当し、下黒野式は晩期III式に位置づけられよう。大石式から上菅生B式期までは多量の扁片打製石斧をはじめ、磨製石斧・石皿・石ノミ・石庖丁形石器・石匙・打製石鏃・紡錘車様土製円盤・紡錘状管玉など石器その他の遺物のセットが基本的に一致し不変であるが、下黒野遺跡では石器は半月形の横長剝片利用の削器（石庖丁形石器？）と磨石の2点のみで、他に扁平打製石斧を欠くこと、壺の出現、黒色磨研の浅鉢の急激な減少等、晩期前葉後葉にみられる晩期繩文の生活文化との間に一種の断絶を認め得るのである。

下黒野式の土器内容は福岡市板付遺跡の夜臼式に照応すると考えられ、この時期彼地で水稲耕作が行なわれていることと思いをいたせば、上記の「断絶」を、弥生時代の開始という観点で理解することもできよう。ただ稲作↓貯蔵機能の重視↓大形壺の出現という図式で、逆は必ずしも真ではあり得ず、壺はここでも弥生時代開始を論じる際の蹟となる。

宇佐市山本の虚空蔵寺下層出土の甕はゆるやかな屈曲を示す胴部などに細い差異はみられるものの、口縁部のみの刻目突帯、高台状の底部と、下黒野式に属すと考えられるが、壺は検出されていない。

上菅生B式の突帯文甕の成立は晩期前葉以降の深鉢からの型式変化として理解できるものであるが、これは竹田、狄といった大野川上流域のみならず、大野郡朝地町田村遺跡、犬飼町神宿遺跡、宮崎県松添貝塚、北九州市長行、遠賀川河床などでも出土しており、北部九州においても刻目突帯文甕に先行するものとして存在していた可能性が強い。

たまたまこれが刻目突帯への型式変化を終えた時期に、水稻耕作が導入され、壺形土器もまた製作されるようになったというであろう。貯蔵の機能を果たすものを壺というなら、縄文晩期のある種の鉢にも十分壺としての用途を認めうるものもあるが夜臼式や原山式の壺は晩期縄文の黒色磨研土器の製作技術をもって朝鮮無文土器の丹塗磨研壺をコピーしたものと考えられる。

前産の壺の口縁部、頸部などに顕著な屈曲は精製浅鉢などの黒色磨研土器に通有にみられる特徴であるのだから。

ともあれ水稻栽培を伴わない、あるいは壺形土器を伴わない刻目突帯文化というものはあり得るわけで、下黒野遺跡、虚空蔵寺（下層）遺跡の性格解明は今後に残された課題である。

三、刻目突帯甕の展開

大分市玉沢の雄城台遺跡は豊後を代表する弥生の集落跡の一つである。ここで最古の弥生土器は北部九州の前期末葉に併行するものだが、そのセットは実に興味深い。

すなわち甕は下城式、野黒坂Ⅱ類、板付Ⅱ式系統のものからなり、壺も大きく伸びた口縁部で頸部・胴部に刻目突帯をめぐらすもの、胴・頸部上部に沈線を入れる台ノ原Ⅰ式類似のもの、その他からなる。高坏は低い脚部に長方形の透孔をうがったものである。

筑紫野市野黒坂遺跡⁽⁸⁾において、如意形口縁甕の口縁部に幅広い粘土帯を貼りつけたものを野黒板Ⅰ類とし、この退化型式をⅡ類とするが、これを介して北部九州の編年につらなることが可能である。刻目突帯を有す壺は、畿内第Ⅰ様式中、愛知西志賀式にあり、東からのはね反り現象としてとられることもできよう

刻目突帯、刷毛目調整を特徴とする下城式甕は胴部が下ぶくれで、口縁部が内湾する古式のもので、中期になると、胴のふくらみが小さくなり、直線的にひろがって口縁部にいたる。中期の下城の細分は未だ手がかりがつかめず、これも課題の一つとなる。

下城式は県北の宇佐平野においても、台ノ原遺跡⁽⁹⁾、高居遺跡、東上田遺跡などで出土するが、県境の山国川付近で北部九州で盛行する亀ノ甲式と接触する。新吉富村中桑野遺跡出土の如意形口縁下に刻目突帯をつけた甕はまさしく両者の折中型式と考えられよう。下城式の分布の中心は明らかに豊後、それも大分平野を核にした海岸沿いの地域にある。佐伯市自瀨⁽¹¹⁾、同長良遺跡、宇佐市東上田遺跡にみられるように貝塚を伴うこと、武蔵町内田遺跡のように砂丘上に立地するものが存在することなどが、大分県における弥生文化の流入、成立過程の問題を解くカギとなろう。

ところで大野川中流域⁽¹⁰⁾までは弥生前期末～中期初頭の時期に弥生文化は入っているが、上流域で確実な資料は報告されていない。

下黒野式以降、弥生前末までの時期が土器編年上も未だ空白のままになる。理論的には、晩期刻目突帯文土器の系統を引く土器がそのミッシングリンクをつなぐものである可能性が最も強く、このような観点に立つとき、大野町宮迫遺跡⁽¹²⁾他数ヶ所で見られている一群の甕形土器の位置づけが明確になってくる。これは口縁部下位および胴上半部に刻目突帯を有す粗製の甕で、突帯の間を沈線文様で飾るものや、刻目突帯を数条に増すものがある。口縁部や胴部が下黒野式や夜臼式にみられる晩期甕の伝統ともいえる直線的な屈曲を示さず、宮迫の例などは口縁部が内湾気味にさえなっている。これらの土器は胎土、焼成とも晩期のそれと全く同じで、外面調整もハケメはみられず伝統的な条痕仕上げとなっている。明らかに晩期土器型式の流れ

の中で、とらえ得る型式変化をおこしたものであり、豊後に下城式が成立する以前（一部下城式に併行する）の一型式と考えてみたらどうであろうか。

（未完）

- 註(1) 山崎純男他『板付遺跡調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第四九集 一九七九年
- (2) 賀川光夫他『新版考古学講座』三 先史文化 雄山閣 一九六九年
- (3) 高橋・後藤一重「菅生台地の調査」一九七九年（古文化研究会発表要旨二〇）一九八〇年
- (4) 渋谷忠章他「下黒野遺跡」大分県教育委員会 一九七四年
- (5) 坂本嘉弘他「浦久保遺跡」萩台地の遺跡 一九七九年
- (6) 大分県教育委員会『法鏡寺跡・虚空蔵寺跡』一九七三年
- (7) 田中良之氏の御教示による。
- (8) 松岡 史、前川威洋「野黒坂遺跡」福岡南バイパス埋蔵文化財調査報告』第一集 福岡教委 一九七〇年
- (9) 大分県教育委員会「台ノ原遺跡」大分県文化財調査報告 第三三集 一九七五年
- (10) 前川威洋他「中桑野遺跡」新吉富村教育委員会 一九七八年
- (11) 賀川光夫・小田富士雄「白瀉遺跡」佐伯市教委 一九五八年
- (12) 清水宗昭・坂本嘉弘「大野原台地の遺跡」大野町教委 一九七六年